

## 審査の結果の要旨

氏名 大塚（小野） 寛子

本研究は、乳幼児予防接種についての情報提供に関する母親のニーズに基づき、任意接種と定期接種が併存する日本の状況に合った親向けの教育プログラムを考案し、乳幼児予防接種教育プログラムの有効性をランダム化比較試験により検証したものである。その結果、下記の知見を得ている。

1. 研究 I では、教育プログラム用の教材と医療者向けの手引きのpilot版を作成し、母親のニーズを明らかにするために、インタビューガイドとpilot版を用いて乳幼児をもつ母親への半構造的インタビューを実施した。母親のニーズを基に乳幼児予防接種における教育プログラムの対象者・方法・内容・時期を検討し、四つの要素をもつ乳幼児予防接種教育プログラムを考案した。
  - 1) 乳幼児予防接種教育プログラムの要素一は、夫・家族参加型の教育的介入により、予防接種についての話し合いを促し、教材はコミュニケーション・ツールとして活用する。要素二は、妊娠中から予防接種を受ける準備行動（かかりつけ医・医療機関探し）を促す。要素三は、ワクチンにより予防可能な疾患、接種開始時期と適時接種の必要性を伝える。要素四は、対象者に合った予防接種の最新情報へのアクセス方法を確認するというものである。
  - 2) 乳幼児予防接種教育プログラムの概要は、初産・経産両者を対象に、夫（パートナー）の予防接種教育への参加と啓発を取入れ、妊娠後期の健診時に個別教育を行い、産後1か月健診時に予防接種の準備状況を確認するものである。
  - 3) 最も新しい知見は、夫と話合って接種するかどうかの意思決定ができるよう夫への働きかけをしてほしいという母親のニーズが明らかになったことであり、任意接種が存在し、親による意思決定が必要な日本に特有な母親のニーズである可能性が考えられた。接種を受けるかどうかは親の判断に委ねられており、母親ひとりで意思決定することの責任の重さを軽減する支援として、妊産婦だけでなく夫または児の保護者等の家族を含めたアプローチが大切であることが示唆された。
2. 研究 II では、研究 I で考案した乳幼児予防接種教育プログラムの有効性を検証するため、Intention-to-Treat (ITT)解析を実施したところ、先進的な取り組みをしている病院における乳幼児予防接種に関する親向けの教育プログラムの有効性が示された。
  - 1) 生後3か月時点の任意接種ワクチン（B型肝炎ワクチン、ロタウイルスワクチン）

の接種割合、夫婦で接種を受けるかどうかの意思決定をすること、予防接種に対する意向、予防接種に関する知識、予防接種に関するヘルスリテラシー（必要になったら、予防接種に関する情報を自分自身で探し利用できる）において乳幼児予防接種に関する親向けの教育プログラムの効果が示された。

- 2) 子どもの予防接種を受けるかどうかの意思決定を夫婦で行うことに効果があった点、予防接種に関するヘルスリテラシーで効果が示された点は、我々の知る限り世界初の成果である。特に、考案した教育プログラムのオリジナリティである、夫に働きかける夫・家族参加型の教育的介入で夫が参加できない場合でもコミュニケーション・ツールとして教材を活用したこと、必要になったら予防接種情報を自身で探し利用できるよう対象者に合った予防接種の最新情報へのアクセス方法を確認するという介入が効果的であった。
- 3) 臨床への示唆として、妊婦健診に夫や家族が同行している場合には医療者から直接働きかけ、同行していない場合には間接的に、妊産婦とその夫・家族が予防接種についての情報を共有し、一緒に考え意思決定できるよう支援することが重要である。さらに、必要になったら予防接種に関する情報を自身で探し利用できるよう、対象者に合った予防接種の最新情報へのアクセス方法を確認することで、今後の予防接種行動につながると考えられた。

以上、本論文は、母親のニーズに基づいて直接的・間接的に夫に働きかける教育プログラムを開発し、妊娠期からの親向けの乳幼児予防接種教育プログラムが効果的であることを示した。母親のニーズに基づいて、子どもの予防接種を受けるかどうかの意思決定を夫婦で行うこと、予防接種に関するヘルスリテラシーについての介入とその効果を検証した点で、本研究は独創性がある。さらに、任意接種が存在するという日本の状況に即した乳幼児予防接種教育プログラムによる妊産婦とその夫（パートナー）・家族への効果的な支援は、予防接種状況の改善につながり、学術的・疫学的・臨床的意義を備えている。本研究の成果は、乳幼児予防接種教育に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。